

J.S.バッハ作曲「三声シンフォニア」の楽曲分析と演奏解釈

— 第6番 ホ長調 BWV 792 —

藤 本 逸 子

はじめに

この小論に先立ち、「J.S.バッハ作曲『二声インヴェンション』¹⁾の楽曲分析と演奏解釈」²⁾と題し、「第1番 ホ長調 BWV 772³⁾」から「第11番 ト短調 BWV 782」までの11曲を、「豊橋短期大学研究紀要 第2号」から「同第12号」の各号に、それぞれ楽曲分析し演奏解釈した。また、「第12番 イ長調 BWV 783」から「第15番 ロ短調 BWV 786」までを、「豊橋創造大学短期大学部研究紀要 第14号」から「同第17号」に、同じく楽曲分析し演奏解釈した。続いて、「J.S.バッハ作曲『三声シンフォニア』の楽曲分析と演奏解釈」と題し、「第1番 ホ長調 BWV 787」から「第5番 変ホ長調 BWV 791」を、「豊橋創造大学短期大学部研究紀要 第19号」から「同第23号」に、楽曲分析し演奏解釈した。この小論も、それらと同じ観点にたつて、「三声シンフォニア」の「第6番 ホ長調 BWV 792」を取り上げたものである。

楽曲分析と演奏解釈

「Sinfonia 6」は、音階に沿ったシンプルな1小節分の主題が次々と出現し、一見、非常に単純な楽曲のように見える。しかし、J.S.バッハは、その清楚な装いの中に、様々な創意をちりばめている。J.S.バッハの意図を探る作業は、隠された宝物を探すような楽しみを筆者に与えてくれた。

1) 「二声インヴェンション」と「三声シンフォニア」という呼び名については、豊橋短期大学研究紀要第2号「J.S.バッハ作曲『二声インヴェンション』の楽曲分析と演奏解釈」藤本逸子1985年（以下「第2号における小論」）の「『インヴェンション』について」の項を参照のこと。
2) 作品名・書名・強調語句は、原則として「 」に入れて表わす。
3) BWV=Bach - Werke - Verzeichnis, W. シュミーダーによるJ.S.バッハ作品総目録番号。

「W.F.バッハのための小曲集」⁴⁾において、この「Sinfonia 6」にあたるのは、60番目の曲で、「Fantasia 12」(BWV 792)と題されている。双方には、表Iに示したように、**22**と**38**⁵⁾には、際だつ違いがあるが、それ以外には大きな違いはない。

表I 「Sinfonia 6」と「Fantasia 12」の相違箇所

Sinfonia 6	Fantasia 12
18 上声1拍め ♩	18 上声1拍め 装飾音なし
22 下声1～2拍め A音 ⁶⁾ Gis音 Fis音 E音 Dis音 Cis音	22 下声1～2拍め A音 H音 Cis音 Dis音 E音 Fis音
38 上声1～3拍め E音 Dis音 Cis音 Gis音 Fis音 E音 Dis音 A音 Gis音 Fis音 E音 H音	38 上声1～3拍め E音 Gis音 Fis音 A音 Gis音 H音
41 小節内6拍分の歴時	41 小節内9拍分の歴時

楽 曲 分 析 (譜1⁷⁾ 参照)

この曲は、二つの部分からなり、それぞれの部分は、次のような構成になっている。

第1部 1 ～ 17 (17)	第2部 18 ～ 41 (24)
主 題 1 ～ 3 (3)	主 題 18 ～ 26 (9)
間奏1 4 ～ 5 (2)	間奏4 27 ～ 28 (2)
主 題 6 ～ 7 (2)	主 題 29 ～ 34 (6)
間奏2 8 (1)	主 題 35 ～ 37 (3)
主 題 9 ～ 10 (2)	終 止 38 ～ 41 (4)
間奏3 11 ～ 15 (5)	
主 題 16 ～ 17 (2)	

4) 「W.F.バッハのための小曲集」については、「第2号における小論」の『「インヴェンション」について』の項を参照のこと。

5) 小節数は、数字を□で囲むことによって表わす。例：第4小節め→**4**，第3小節めから第10小節め→**3**～**10**。

6) 音名は、原則としてドイツ音名で表わす。例：変ロ音→B音、嬰へ音→Fis音。

7) この小論における「Sinfonia 6」に関する楽譜は、Johann Sebastian Bach 「Inventionen und Sinfonien」Urtext (Bärenreiter-Verlag. Kassel 1972) を用いている。国内においては、ベーレンライター社の許可を得て、全音楽譜出版社が、印刷出版している。

各部分における楽曲分析

第1部

主題

- ①～③・上声部①は、全休符である。
- ・中声部①に、三つの八分音符が順次上行する要素（a）二つと、同じく三つの八分音符が二度上行し3度下行す要素（b）一つからなる主題（T）がある。この（T）は、②では上声部に、③では下声部に出現する。これらの（T）は、①では、E dur⁸の主音E音から始まるが、②と③では、H音から始まり、③では、早くもH durに転調している。
 - ・下声部①には、付点二分音符と付点四分音符からなる二度下行する要素（c）がある。この（c）が、（T）の対旋律のような働きをしている。この（c）は、②と③では中声部に現れる。ただし、②では2度上行する反行形（c'）となっている。また、上声部③には、（c）の逆行形のリズムに変形された（c'）がおかれている。
 - ・下声部②は、ゲネラルバスの動き（GB）をしている。

間奏1

- ④～⑤・④～⑤上声部と中声部は、（c）と（c'）を組み合わせ、タイによる掛留音も用いながら、順次下行している。この長い音符の下行は、（a）の反行形の拡大したものである（ex）。
- ・④～⑤下声部は、（a）と（b）を交互に組み合わせ、ゼクエンツしながら、これも順次下行している。下声部のこの動きは、3拍子2小節の中で、2拍子3小節のように感じさせる。

主題

- ⑥～⑦・⑥～⑦上声部は、（c）と（c'）である。
- ・⑥～⑦中声部は、（T）と（c）である。この（T）は、出だしの（a）が間奏1の最後の付点四分音符のE音とタイで結ばれ変形している（a'）。
 - ・⑥～⑦下声部は、（GB）と（T）である。この（T）も中声部の（T）もEから始まっており、H durからE durに戻っている。

間奏2

- ⑧・⑧は、3声部とも、間奏1を1小節分だけ再現したようになっている。

主題

- ⑨～⑩・⑨～⑩上声部は、（c'）の反行形（c''）と（T）である。この（T）も出だしが（a'）となっている。
- ・⑨～⑩中声部は、上声部とは前後が逆の（T）と（c'）となっている。
 - ・⑨～⑩下声部は、（GB）と（c）で、上の2声の（T）を支えている。
 - ・⑨～⑩の間に、c mollに転調している。

8) 調名は、原則として、ドイツ音名を用い、ドイツ音名の太文字は長調、小文字は短調を表す。例、ハ長調→C dur あるいはC、イ短調→a moll あるいはa.

間奏3

- ⑪～⑮・⑪～⑮上声部は、(b)の跳躍音程が広く変形した(b')が二つ並び、休符の後、c mollからH durに転調しながら、順次下行している。この長い音符の下行は、(a)の反行形の拡大したものである(e×)。
- ・⑪～⑮中声部は、上声部とは反対に休符の後(b')が二つ並び、(GB)と(c)と続き、⑮は次の主題の先取音となっている。
 - ・⑪～⑮下声部は、(GB)的動きと休符の後、(b')をゼクエンツで、順次下行させている。

主 題

- ⑯～⑰・⑯～⑰上声部は、休符の後、(T)の反行形(L)が続き、H durで第一部を閉じている。この(L)は、(a)の反行形(e)二つと(b)の反行形(q)一つからなっている。
- ・⑯～⑰中声部は、(a')で始まる(T)に(c)が続いて第一部を終えている。
 - ・⑯～⑰下声部は、(GB)で上2声を支えて第一部を終える。

第2部

主 題

- ⑱～⑳・第2部は、H durで始まる。下声部に(T)が現れ、⑲でそれが中声部に受け継がれ、その後㉑～㉒の上声部に移り、3回ゼクエンツして3度ずつ高い音になって(T)が奏される。この間、H durから、fis moll, A dur, cis mollと、めまぐるしく転調している。
- ・⑱～㉒の(T)を奏してない声部は、次のようになっている。上声部は、⑱～⑲と休符である。中声部の⑱は、第1部の終止音の後、休符。中声部の㉑～㉒は(c')の反行形(o')と(c)の反行形(o)で、上声部の(T)に相對した後、休符。下声部は、⑲で、(a)と(a)の反行形(e)で中声部の(T)に相對した後、㉑～㉒で、(GB)と(c')の反行形(o')で上2声を支え、㉒では、(a)の反行形(e)二つと(a)一つで、上声部の(T)に相對している。
 - ・㉓～㉔は、(T)の反行形(L)が多用されている。㉓中声部、㉔上声部、㉕下声部、㉖中声部と、(L)が現れる。㉔上声部と㉖中声部の(L)は、出だしの(e)が変形された(e')となっている。㉓～㉔の(L)を奏していない声部は、㉕上声部が、(a)と(b)で、下声部の(L)に相對している以外は、保続音と休符となっている。

間奏4

- ㉗～㉘・㉗～㉘は、間奏1と同じ構造となっている。ただし、(a)と(b)の組み合わせの音形は、中声部にある。

主 題

- ㉙～㉚・㉙～㉚は、下声部に(T)の反行形(L)を置いた後、中声部、上声部、中声部、上

声部と交互に、(T)を配している。ただし、これらの(T)は、出だしの(a)がリズムの変化だけではなく音形的変化もしている(T')。この(a')の先主音が、保続音の働きもしている。この間、cis mollからE durに転調し、フェルマータの付いた減三和音に行き着く。

主 題

③⑤～③⑦ ・ ③⑤～③⑦は、(T)が中声部、下声部、中声部の順に出てくる。③⑤と③⑦中声部の(T)には、上声部の(T)の反行形(L)が相対している。

終 止

③⑦～④① ・ コーダである。上声部は、(b)の反行形の変奏形(q')を3回繰り返し、(T')の後、休符を経てカデンツに入り曲を閉じている。
 ・ 中声部は、(a)の拡大した(a×)の後、上声部に沿って、6度下で同じく(T')を奏し、上声部と共に休符を経てカデンツに入り曲を終えている。
 ・ 下声部は、中声部と同様、(a×)を中声部の3度下で奏し、休符の後、カデンツを経て、最後のE durの主音に落ち着く。

演 奏 解 釈（譜2参照）

テンポ

テンポに関して、諸校訂版⁹⁾は、表Ⅱのような指示をしている。

表Ⅱ 諸校訂版における「Sinfonia 6」のテンポに関する指示

校 訂 者	テンポに関する指示
Hans Bicschoff	Allegro ♩ = 1 0 4
Ferruccio Busoni	Allegro"alla Gigue"
Alfredo Casella	Allegro scorrevole
S.A.Durand	Moderato elegantemente
James Friskin	Allegro moderato ♩ = 9 6
Vilem Kurz	Allegro non troppo
Wm.Mason	Allegro moderato
G.E.Moroni	Allegro moderato ♩ = 8 4
Bruno Mugellini	Allegro ♩ = 1 2 6
Julius Rötgen	Allegretto non troppo ♩ = 9 6
井口基成	Allegro
千倉八郎	Allegro ♩ = 1 2 0

9) 各校訂版及び、各CDの出版については、本小論の「参考文献・参考楽譜・参考CD」の項を参照のこと。

また、内外10人の演奏時間は、表Ⅲのとおりである。

表Ⅲ 諸演奏家における「Sinfonia 6」の演奏時間

演奏者	録音年	楽器	演奏時間
Aldo Ciccolini	不明	ピアノ	1'29"
Christoph Eschenbach	1974年	ピアノ	1'15"
Glenn Gould	1963～64年	ピアノ	0'53"
Tatyana Nikolayeva	1977年	ピアノ	1'24"
András Schiff	1982～83年	ピアノ	1'17"
高橋悠治	1977～78年	ピアノ	1'53"
田村 宏	不明	ピアノ	1'19"
Kenneth Gilbert	1984年	チェンバロ	1'15"
Gustav Leonhardt	1974年	チェンバロ	1'29"
Helmut Walch	1961年	チェンバロ	1'22"

グレン・グールドと高橋悠治の演奏時間は、2倍以上の開きがある。グールドは、八分音符のテーマの動きをあざやかにノンレガートで弾ききっていた。高橋は、テーマの八分音符にアーティキュレーションの変化を豊かにつけ、装飾音符も豊富なふくよかな演奏をしていた。また、アンドラー・シフは、③4にカデンツを挿入し、自由な演奏も楽しめる可能性を示してくれていた。

校訂版における速さの指示もずいぶん幅があるが、上記の演奏者ほどの差はない。ブゾーニは、「ジグのように」と指示している。これは、興味深い。ジグは、生き生きとした性格を持つ舞曲である。この曲の特徴の一つをよく表しているといえよう。

筆者は、「Allegretto ♩=84」というテンポをとり、落ち着いたテンポで軽やかな演奏をしたい。

アーティキュレーション

付点四分音符や付点二分音符は、ノンレガート気味にテヌートに演奏する。八分音符はレガートとし、目立ったアーティキュレーションの変化を付けず、なめらかな流れを楽しみたい。

装飾音

記されている装飾音は非常に少ない。その装飾音も含めて、筆者は装飾音の必要を感じない。

各部分における演奏解釈

- ①～③・全曲、軽やかに生き生きと奏でる。テーマの起伏に沿って、*cresc.*と*dim.*をつける。
 ・*mp*で中声部の（T）を弾き出す。上声部の（T）は、*mf*とする。下声部の（T）は、太い声で豊かに奏でる。そのような意味を込めた*f*である。
- ④～⑤・2小節の下声部は、2拍子で3小節に感じる動きを楽しみ、テラス状に*dim.*していく。
- ⑥～⑦・間奏1の変則的な拍子感を楽しんだ後は、それとは対照的に、厳格な雰囲気（T）を響かせる。
- ⑧～⑩・間奏2は*mf*で奏で、続く二つの（T）は、⑩第一部のクライマックスに向かって、*cresc.*していく。クライマックスは充分音を響かせる。
- ⑪～⑮・クライマックスの後の間奏は、その下行する音形にしたがいがい、⑮に向かって、緩やかに*dim.*していく。
 ・⑬からは、下声部の音の動きに合わせて、1小節ごとにテラス状に*dim.*する。
- ⑯～⑰・二つの（T）で、第一部の最後を盛り上げ、第一部を閉じる。
- ⑱～⑳・第二部は、下声部の（T）とそれに続く中声部の（T）が会話しているように奏でる。上声部の三つの（T）は、充分*cresc.*して、全曲中一番のクライマックスまで一気に登りつめる。このとき転調によるめまぐるしい調の変化をしっかりと意識する。
 ・㉓からは次の間奏に向けて、ゆるやかに*dim.*していく。
- ㉗～㉘・間奏4は、間奏1同様に拍子の変化を楽しむ。
- ㉙～㉚・三つの声部の間を渡り歩く（T）が、それぞれ次の（T）に会話をリレーしていくように奏で、㉚のフェルマータの付いた付点四分音符に向かってエネルギーを蓄えていく。
- ㉛～㉜・㉚のフェルマータの後、いったん落ち着き、（T）と（J）の絡みを楽しむ。
- ㉝～㉞・上声部の㉝の十六分音符の動きを生かして、最後の（T）に向かって盛り上げ、豊かに（T）を奏でる。
 ・㉟～㊱は、少しテンポをゆるめて、堂々と曲を閉じる。

お わ り に

「Sinfonia 6」は、J.S.バッハらしい高度な作曲技法が随所にちりばめられているにもかかわらず、楽譜から受ける目の印象も、演奏をから受ける耳の印象も、非常にシンプルである。緻密に作られているが故のシンプルさであろう。「Sinfonia 6」が自然な音の起伏を素直に楽める曲であるのは、それが理由ではなかろうか。

参考文献・参考楽譜・参考CD

* 参考文献

- ・市田儀一郎 1983年「バッハ・インヴェンションとシンフォニア」（音楽之友社）
- ・山崎孝 1984年「バッハ・インヴェンションとシンフォニア」（ムジカノーヴァ）

* 参考楽譜

原典版

- ・Johann Sebastian Bach 「Klavierbuchlein für Wilhelm Friedemann Bach」 Urtext (Bärenreiter - Verlag, Kassel 1979)
- ・Johann Sebastian Bach 「TWO- and THREE-PART INVENTIONS」 Facsimile of the Autograph Manuscript (Dover Publications, Inc., New York 1978)
- ・BACH 「Inventionen und Sinfonien」 Urtext (Bärenreiter - Verlag, Kassel 1972)
- ・J.S.BACH 「Inventionen Sinfonien」 Urtext (G. Henle Verlag, München 1978)
- ・BACH 「INVENTIONEN UND SINFONIEN」 Urtext (C.F.Peters coporation, Frankfurt 1933)
- ・J.S.Bach 「Inventionen und Sinfonien」 Urtext (Musikverlag Ges. m.b. H&Co.,K.G.,Wien 1973)
- ・バッハ「インヴェンションとシンフォニア」原典版 角倉一朗校訂（カワイ出版 1983）
- ・バッハ「インヴェンションとシンフォニア」原典版 長岡敏夫編（音楽之友社 1965）

校訂版

- ・J.S.BACH 「15 SYMPHONIEN」 Hans Bischoff (Steingraber Verlag, Offenbach/M)
- ・BACH 「TWO-and Three-Part Inventions」 Ferruccio Busoni (G.Schirmer, New York 1967)
- ・J.S.BACH 「Dreistimmige Inventionen」 Ferruccio Busoni (Breitkopf&Haltel Weisbaden)
- ・BACH 「INVENTIONI TRE VOCI」 Alfredo Casella (Edizioni Curci Milano 1946)
- ・J.S.BACH 「Inventions à 2 et 3 voix」 Durand S.A. (Editions Musicales, Paris 1957)
- ・J.S.BACH 「Three-Part Inventions」 James Friskin (J.Fischer & Bro. Belwin Mills 1970)
- ・JOH.SEB.BACH 「15 Dreistimmige Inventionen (Sinfonien)」 Alfred Kreutz (B.Schott's Sohnen Mainz 1950)
- ・BACH 「DVOUHLASÉ INVENCE A TŘÍHLASÉ SINFONIE」 Vilem Kurz (Editio Supraphon, Praha 1981)
- ・BACH 「Three-Part Inventions」 WM.Mason (G.Schirmer Inc New York 1967)
- ・BACH 「15 INVENTIONI A 3VOCI」 G.E.Moroni (Carisch S.p.a. Milano 1981)
- ・BACH 「INVENTIONI A TRE VOCI」 Bruno Mugellini (Ricordi 1983)
- ・JOH.SEB.BACH 「ZWEI-UND DREISTIMMIGE INVENTIONEN」 Julius Rötgen (Universal Edition, Hungary 1951)
- ・バッハ「二声部インヴェンション 三声部インヴェンション 小前奏曲・小フーガ」バッハ集4 井口基成（春秋社 1983）
- ・バッハ「インヴェンション」（音楽之友社 1955）
- ・バッハ「インヴェンション」全音楽譜出版社出版部編（全音楽譜出版社）
- ・バッハ「インヴェンション&シンフォニア」ピアノ指導講座7 千倉八郎編（日音楽譜出版社 1983）
- ・バッハ「インヴェンション&シンフォニア 解釈と奏法」千倉八郎編（日音楽譜出版社 1983）
- ・J.S.バッハ「インヴェンションとシンフォニア」Hans Bischoff 角倉一朗訳（全音楽譜出版社 1972）

* 参考CD

- ・Aldo Ciccolini (Piano) 「J.S.BACH INVENTION」 TOCE6601 (TOSHIBA EMI)
- ・Christoph Eschenbach (Piano) 1979 「INVENTION & SINFONIA」 F26G20323 (POLYDOR)
- ・Glenn Gould (Piano) 1989 「BACH INVENTIONS & SINFONIAS」 28DC5246 (CBS SONY)
- ・Tatyana Nikolayeva (Piano) 1986 「J.S.Bach INVENTIONS AND SINFONIAS」 VDC-1079 (VICTOR)
- ・Andárs Schiff (Piano) 1985 「J.S.BACH 2&3 PART INVENTIONS」 FOOL-23100 (POLYDOR)
- ・高橋悠治 (Piano) 1991 「インヴェンションとシンフォニア 他」 COCO-7967 (NIPPON COLUMBIA)
- ・田村宏 (Piano) 1989 「J.S.バッハ インヴェンション」 CG-3722 (NIPPON COLUMBIA)
- ・Kenneth Gilbert (Cembalo) 1985 「J.S.BACH INVENTIONEN UND SINFONIEN」 POCA-2113 (ARCHIV)
- ・Gustav Leonhardt (Cembalo) 1992 「バッハ：インヴェンションとシンフォニア」 BVCC-1863 (BMG VICTOR)
- ・Helmut Walcha (Ammer-cembalo) 1961 「J.S.バッハ／2声部のためのインヴェンション&3声部のためのシンフォニア」 TOCE-7231 (TOSHIBA EMI)

譜1 「Sinfonia 6」 BWV 792 ①~④① (楽曲分析)

第1部 主題

①

T a a b c' e ×

a a b c

2' 3'

GB

E:→H:→E

間奏1

主題

4

c c'

a b a

b c a b

a T a b

a a b

E:

GB T

間奏2

主題

8

c'

a c b a

a T a b

c'

c

E:→Cis:

GB

間奏3

主題

12

c'

b' b'

b' b' b' b' b' b'

4° 6° 6° 4° 6° 6°

Cis:→H:

GB

第2部 主題

15

a a b

b' b' b'

T

c

L v v q←

T

H:

GB

19
H:→fis:→A:→cis:
GB

23
Cis:→E:
L

間奏4 主題

27
E:→Cis:
L

31
Cis:→E:
L

主題

35
E:
T

終止

38
E:
a x
K

譜2 「Sinfonia 6」 BWV 792 ①~④① (演奏解釈)

少々テンポをゆるめる

19 *cresc.* 全曲中最大のクライマックス

23

27 *cresc.*

31 *f* 幅広く

35 *mf*

38 *f*